しゃくしゃく、と雪の地を踏みしめる足音が、冷えた道に音を落としてゆく。
「どうするよ」
黒い悪魔が言った。
「どう、する？」
幼い少女が言った。
「どうするって言うか……」青年が語気を強めた。
「僕が目を離した隙に旅商人に金を盗られるなんて、悪魔（ベルゲレ）の面目なしだね、ムスタ」
すすけた大地色のマントで全身をおおい身体を震わせながら、シャンカはかたわらを飛行する黒い悪魔をにらみつけた。
「俺様のせいだってか？」黒羽がばさりと羽ばたく。
「それ以外に誰のせいだって言うわけ？」
「――甘飴（キャンディ）、ラトが、欲しかった……」
羊糸で編みこんだ白い帽子を額まで深くかぶった幼い少女が、眠たそうなまぶたでシャンカを見上げる。
「ラトのせいじゃないよ」
「なんだよ、いつも俺様のせいかよ！」
「子供のせいにするわけ、ムスタ？　悪魔（ベルゲレ）のクセに」

「あの商人が悪いんじゃねェか。俺様をだまそうなんて、命知らずなヤツだ」
「その姿じゃなかったから、舐められたんだろう？」
「行商人が怖がるから、この姿でいるのを止せって言ったのは、テメェだろうが！」
「まさか有り金全部、持って行かれるとは思わなかったんだよ！」
木枯らしが、ぐるりと小さな竜巻を生んだ。
「ハコ……」
ラトが呟いた。小さな右手にシャンカの茶色いマントを握り締め、ぐいと二回引く。
「なんだい、ラト――箱？」
「ハコ、おおきな、ハコ」
「寒さでおかしくなったか、ガキ」
「おおきな、ハコが、ある」ラトは小さな指を正面に突きつけた。
悪魔と青年はその指先を視線でたどると、
「なんだ!?」
「……箱……だね」
同時に目を見開いた。粉雪と木枯らしの先に、大きくそびえる灰色の建物があった。四角く形どられたその大きさは、悪魔にすら口を大きく開かせるほどで、横幅は雪原の先にながく伸びており、高さは天までも届かんばかりに、そびえていた。

顎を引き上げたムスタは、黒羽をゆっくりと羽ばたかせ、雪原に足を着いた。
「……なんだ、こいつはァ？」
「おおきい、ハコ」
「うーん、集落、かな？」シャンカが指で顎をなでる。
「俺様、こんなもん、見たことねェぞ」
「うん、でも、見て。あそこに門のようなものがあるよ」
そう指で示した先に、銀色に染まる観音開きのおおぶりな扉が、確かに見えた。
「門！」ラトが飛び跳ねた。
「――うさんくせェな」
ムスタは両腕を大きく組んで見せる。
「集落なら、金策が出来るかもしれない。行ってみよう」
シャンカがマントをひるがえすと、ムスタが腕を組みしゃがれた声でその足を留(とど)めた。
「……いきなり別の集落に飛び込むつもりか、テメェ」
「雪の中、無一文で、ずっと歩き続けるよりもましだろう、ムスタ？」
意味ありげな視線を受けて、ムスタは舌打ちをした。嬉々として飛び跳ねるラトを右腕でぐいと抱えこみ、黒翼を羽ばたかせ積もった雪を撒(ま)き散らしながら浮かび上がった。
「攻撃されても、知らねェぞ」

「……そのときはそのときだよ」
「テメェ、悪魔に近くなってきたんじゃねェか、性格がよ」
「ムスタこそ、人間ぽくなってるんじゃない？　考え方が」
「門、門!!」
しゃくしゃくと足音を立てて青年は行く。黒翼を広げた悪魔と、その腕に抱えられ、重そうなまぶたのまま、両手を叩いてはしゃぐ少女が後方に続いた。
粉雪をあおる風がごうごうと勢いを増し、強い吹雪の予兆を感じさせる。
シャンカが扉の前で立ち止まった。
「すごい……こんな技術があるなんて」
黄金でも、鉄でもない、見たことも無い物質だった。寒さによって赤く腫れた手のひらを扉の表面にぺたり押し付けて、シャンカは感嘆の声を上げる。
「びくともしない」
「開かねェんじゃねェか？」
「門……」ラトが、落胆したように呟いた。
そのとき、ぎりぎり、という不可思議な音と共に門に、大きな振動が足元に広がった。ごうんごうん、と耳慣れない重低音を響き渡らせ、門の中心がゆっくりと外側に動き出す。
「開くみたいだ……ムスタ」

シャンカが視線を投げると、ムスタは不服そうに全身をひとつ震った。黒い煙を伴いながら、瞬く間にムスタの身体が形状を変えてゆく。煙が晴れて、現れたのは大きな黒狼だった。
「これでいいんだろ」喉を唸らせて、シャンカの足元からムスタが言った。
「ムスタ、わんわん」
ラトが二度、黒狼の頭部を撫でる。
「犬じゃねェ、狼だッ」
「ほら、開くよ、静かにして」
「わんわん」
ごうん。扉は、ちょうど大人一人分通り抜けられるほどの隙間を開けた、その動作を停止した。明るく光さす内側から、熱風と共に一人の男がシャンカの前へ歩み出た。
「貴様ら、何用だ」
長剣を腰からぶら下げ、銀色の甲冑で体中を覆った兵士は、訝しげな視線でシャンカと少女、そして黒狼をにらみつけた。
「僕らは旅人です。この吹雪で道に迷ってしまって……入れていただけませんか？」
シャンカが眉根を寄せて告げると、
「良かろう、入れ」たやすく、兵士はうなづいた。
門の裏側に戻り、ぎりぎりと扉を広げると、促すように手招きをする。

「その狼は、安全か？」
ぶるぶると身体に積もった雪を払う黒狼を見ながら、兵士が言った。
「安全です。狼のような犬ですので」
「――わんわん」
シャンカはラトを腕に抱え上げ、がう、と背後でうなるムスタを一瞥した。
「良かろう。では――入れ」
二人と一匹が内部に入ると、背後で隙間を空けていた扉が再び、音を立てて閉まってゆく。
扉の奥には、暖かい空気に満たされ肌色の壁におおわれた、大きな四角い部屋があった。シャンカから向かって左側に、大きな歯車と、おそらく門を制御しているのだろう、銀色の丸い大きな取っ手が設置されている。正面にもうひとつ、同じ形状の扉があった。
その表面には大きく文字が刻まれている。
「テラの領地？」
文字を読み上げたシャンカが、首をかしげた。
「この場所のことだ」兵士が、答えながら、シャンカの脇に歩み寄った。
「ここではいくつかの集落がまとまって暮らしている。この気候のせいで困難な生活を強いられていた集落の人間達は、偉大なるテラ王が作ったこの空間のおかげで、自給自足をしながら生きることが出来るようになったのだ」

「テラ……王？」
シャンカにとって、王とは書物でしか出会ったことのない存在だった。シャンカの生まれた辺りでは、長が集落を統治することが当たり前だったからだ。
「ここには王が存在するのですか……？」
「王、と呼ぶのは我々の意思だ。テラ様が王を名乗ったのではない」
兵士は鼻息を荒くふき出しながら、拳を握った。
「この領地のすばらしさを見てもらえれば、きっとキミも驚くだろう。想像すらしたことの無い楽園が広がっているはずだ」
「楽園……ですか……」
シャンカはこっそりと黒狼を振り返った。
黒い毛におおわれた顔が、ぐしゃりとしかめられている。
「らく、えん？」
重たいまぶたのまま、ラトがシャンカを覗き込んだ。
「その子供も幸せだ。この場所にたどり着くことが出来たのだから」
兵士が、甲冑をまとった腕を左側の取っ手にかける。ぎい、と今度はすこし軽めの音を立てて正面の扉が開かれた。暖かい風が頬を撫ぜる。
「……わァ」

シャンカは目を見開き、
「けッ」
ムスタは舌打ちをした。
「らく、えん……」
ラトはそう呟いた後、シャンカのマントを握り締めた。